

戯曲

デ
イ
オ
ニ
ユ
ソ
ス

—二人の母—

Ⅲ

正
道

SEIDOU

目次

ディオニュソス 二人の母	III
全体の目次	3
第8章 冥府行き	
登場人物	7
水の下降トンネル	7
三途の川	9
船から中州へ	12
第9章 ケルベロス退治	
登場人物	17
中州の地下トンネル	17
ケルベロスとの対決	19
第10章 ペルセフォネー	
登場人物	26
冥界の王城へ	26
玉座の間	28
第11章 テュオーネー	
登場人物	37
セメレーが住んでいる世界	37
セメレーの家	39

ディオニュソス 二人の母
III

全体の目次

第一巻のあらすじ

第1章 神を待つ男

第2章 ポリュドーロス

第3章 カドモスとアガウエ

第4章 闖入者

第5章 ペンテウス

第6章 バッコスの信女

第7章 プシュコポンポス

第8章 冥府行き

第9章 ケルベロス退治

第10章 ペルセフォネー

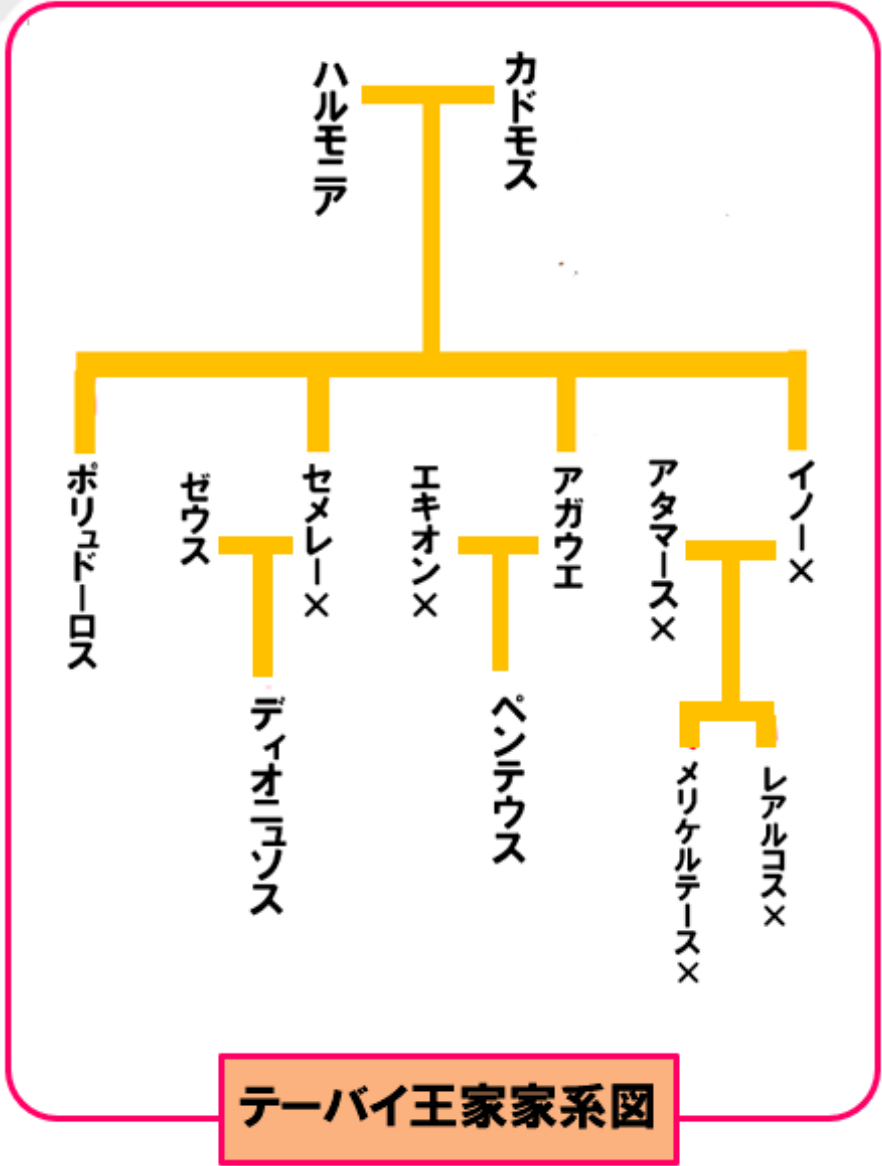
第11章 テュオーネー

2
0
2
4
08
07
(
2
)
p
n
g



関連地図

2024-08-07 (6) .png



第8章 冥府行き

登場人物

ディオニュソス セメレーの息子。冥府に降り、死んだ母に会おうとしている。

ヘルメス・トリスメギストス ヘルメス神に潜在している第二人格。第二といっても、ヘルメス・トリスメギストスのほうが主人格である。三倍も偉大なヘルメス。死者の霊の導き手。

オルフェウス アポロンに仕える詩人音楽家。彼の吟じる歌は、存在する全てのものを魅了する。

カロン 三途の川（ステュクス川）の渡し守。痩せた老人の姿をしている。

ペンテウス テーバイ国王。ディオニュソスに操られた実母によって殺された。

水の下降トンネル

黒い沼にあいた水の穴。その穴に設えられた水の階段。そこでは渦巻く水が、轟々と音を立てている。しかも辺りは暗く、階段を下るごとに完全な暗闇へと近づくかのよう。

その暗い階段を、ヘルメス・トリスメギストス、ディオニュソス、オルフェウスの順で降りていく。明り取りとなるのは、ヘルメス・トリスメギストスの杖が発する、ほのかな光だけである。

ディオニュソス こうして階段を降りていくと、かつて地下の底の底まで降りていった時のことを思い出します。

トリスメギストス あの時、ハデス（冥府）を素通りする形で、地球の中心まで降りていった。だが今回は、意図してハデスへと赴くのだ。

オルフェウス 冥府とは、どのようなところなのでしょう。

トリスメギストス 何はともあれ死者たちの国だが、そこには高低差というか、浅深差のようなものがある。

オルフェウス 浅いと深いがある？

トリスメギストス うむ。深く潜れば潜るほど、その領域は「地獄」という名に相応しいものとなる。そして、その最深部には、地獄のなかの地獄たる「タルタロス」がある。そこはもはや、ハデスの管轄とも言えず、ただ「ある」という以上のことは言えない。

オルフェウス そんなところまで、私たちは降りていかねばならないのでしょうか。

トリスメギストス いや、お前たちが愛する者の魂は、そんなに重いものではない。間違いなくハデスの管轄下である「冥府」にいるはずだ。

ディオニュソス そこで母は、幸せに暮らしているのでしょうか。

オルフェウス 私の妻は？

トリスメギストス さすがに幸せとまでは言えまい。本当に幸せな死者なら「至福の島」に行っているはずだからな。けれども冥府の王ハデスは、自国の領民が減ることを嫌って、滅多に「至福の島」へ死者を送ろうとはしない。

オルフェウス つまり、ハデスに拘束されているようなものなのですね。

トリスメギストス まあそうじゃ。だから、お前たちが母や妻に会うためには、どうにかしてハデスを説得しなければならない。

ディオニュソス それはまた難しそうな……

トリスメギストス しかも、そのハデスのところへだって、一直線に行けるわけではない。そこに辿り着くまでには、いくつかの難関をクリアせねばならない。

ディオニュソス あなたが、その難関を通過させてくださる訳にはいかないのでしょうか。

トリスメギストス そこまで甘えさせる気はないの。お前たち二人が協力すれば、決して通れない難関ではないからな。それにディオニュソス、ハデスの妃もまた、お前たちの協力者になってくれるかもしれない。

れぬぞ。

ディオニュソス どういう意味ですか。

トリスメギストス ハデスのもともで達すれば、おのずと分かることだ。どうれ、今回はかなり長い時間ヘルメスの体を借りてしまった。そろそろ奴のほうの仕事に支障をきたす頃だ。私は世界の裏側へと、引っ込まなければならぬ。

オルフェウス もう去ってしまわれるのですか。

トリスメギストス もうと言っても、周りを見てみよ。水の壁と階段だったのが、いまは岩壁と石段になっている。これは底なし沼から、地下の世界に移行したということじゃ。つまり冥府は近いのだ。今はまだ通路のうちじゃが、これを抜けると、吹き抜けのような地下空間が広がっておる。

ディオニュソス おお、たしかに下のほうに光が見えるぞ。あれだな。

三途の川

通路を抜けた三者の前に、広大な地下空間と、これまた広大な川幅を持ったステュクス川が現れる。霧がかかって対岸が見えないが、これはギリシア版の「三途の川」である。河岸（此岸）には数多の死者たちが歩き回っている。その河岸に到着したディオニュソスたちの前に、大きな船が現れる。

トリスメギストス あれがカロンの渡し船だ。この船で川を渡れば、そこはもう冥府という名の別世界となっている。カローン（と呼んで消える）。

カロン（船のへりに立って） あー、誰か呼んだか？

オルフェウス 呼んだ当人は消えてしまった。

ディオニュソス（カロンに） いや、私たちが呼んだのだ。この船に乗りたくて。

「カロン、船から飛び降りて二人に近づく」

カロン むむ？ やたらと血色がいい二人組だな。お前たちは本当に死人なのか。この船に乗せられるのは、死者の霊だけなのだが。

オルフェウス たしかに生きているが、死者の国に重要な用があるのだ。

カロン あー、生きているのか。じゃあダメだ。船には乗せられん。用があるとか無いとかは関係がない。

ディオニュソス そこを何とかしてほしいのだ。

カロン 冥府の秩序を曲げた者は、問答無用にハデスさまから罰せられる。わしに勝手なことは出来ない。

オルフェウス いいではないか。気づかないで乗せてしまった事にすれば。

カロン そんなことをしたら、あー、ことが露見したときに、今度はわしの無能ぶりが咎められてしまう。だからダメだ。

オルフェウス だって、やっとここまで辿り着いたのだ。いまさら引き返すことなど出来ない。

カロン それはお前たちの都合。わしにとっては、痛くも痒くもない話だ。

オルフェウス それでは取りつく島がない。

ディオニュソス さて、どうしたものか……

「そう独り言ちるディオニュソスの横から、一人の死者が口を出す」

ペンテウス 船頭カロンよ、この方の言うことは素直に聞いたほうがいいぞ。この方は神だ。しかも大神ゼウスの息子ときている。言うことを聞かないと、ハデスからの罰を待つまでもなく、今ここで神罰を受けるかもしれないぞ。

ディオニュソス（死者を見て）ペンテウスか！

カロン 神でゼウスの息子だと？ それを早く言うがいい。一介の地霊であるわしに、神の望みを拒む権利などあるはずもない。問題があるなら神々同士で、つまりハデスさまとあなたとで意見を調節し

あえばいいのだ。

オルフェウス ほう！

カロン あー、わしにとっては、どのような神であっても、等しく上司のようなもの。よって、その望みを叶える以外のことは出来ない。

ペンテウス という事だそうですよ、ディオニュソス神。

ディオニュソス どうして私に助け舟を出す？

ペンテウス ……私は昨夜の祖父たちの様子を見てから、ここに来ました。酔いから醒めた祖父は、祭の喧騒から離れて、ひとり私の生首にこう語りかけていた。せめて死後の世界では、心から神を敬うように、と。

ディオニュソス カドモス王がそんなことを。

ペンテウス 祖父は泣いていて……ずっと泣きながら悲しみに暮れていた。あなたの酒の力も、完全には祖父を慰めることが出来なかった。そして私は、昔から祖父の涙には弱いのですよ。

ディオニュソス そうか……

オルフェウス すばらしい助言をくれた、この死者はどなたです？

ディオニュソス 私の従兄弟だ。

オルフェウス では血縁の情ということですね、なるほど。

ディオニュソス 血縁の情か……

ペンテウス そうですね、もっと早く親類だと気づいていれば、このような事にはなっていなかったかもしれませんね。

ディオニュソス 私も、あなたに死を与えたことに対し、結局、虚しさ以外の感情は味わっていないのです。

ペンテウス 仕方がないことでした。今の私にはそれが判ります。

ディオニュソス せめて……母の霊を救ったら、あなたの魂も救いましょう。あなたは生前において、十分すぎるほどの罰を受けたのですから。

ペンテウス お願いします。

カロン あー、いつまで話をしておられる？ 行きますぞ。乗るならお乗りなさい。

ペンテウス ではお気をつけて。私は次の便まで待つことにします。まだあなたと、船の甲板で隣同士になれるほどには、打ち解けられませんからな。

ディオニュソス そうだな、そのほうがいい。

オルフェウス では船に乗りますぞ、ディオニュソス神よ。

〔ディオニュソスとオルフェウスが、カロンの渡し船に乗り込む〕

船から中州へ

ステュクス川の上流にある中州。カロンの船は、そこを目指して航行している。川の下流よりも霧が濃くなっている。船の甲板に死者の霊はおらず、いるのはディオニュソスとオルフェウス、それとカロンだけである。

オルフェウス 霧のなかに、岸のようなものが見えてきたな。あれが対岸なのか。

カロン いや、あれは中州だ。そして、あなた方の目的地となるところだ。

オルフェウス 何を言うのだ、中州など用はない。我々の目的地は冥府、つまり川の対岸なのだぞ。

カロン あー、それは分かっております。でも「ステュクス川を渡って対岸の冥府へ」っていうのは、

飽くまでも「真正の死者」が通る正規のルートなのです。非正規のお客さんには、そのために造られた特別のルートがございます。

ディオニュソス それが、この中州なのか。

「カロンの船が、このとき中州に着岸する」

カロン そうです。そして、この中州の中央には、ちょっとした洞窟がある。その洞窟が水中トンネルみたい、対岸の冥府へとつながってるんです。あなた方には、そのトンネルを通ってもらうことになる。

ディオニュソス なるほど。

カロン ただ……

オルフェウス ただ？ ただ、なんだ？

カロン あー、非正規であるからには、どうしてもそこに、相応のリスクが付きまとうことになりますわな。

ディオニュソス まあ、そう来るだろうな。

カロン まあ、率直に言ってしまえばですよ。お二人は「非正規」という言葉では、とても言い足りない人たちなんです。つまりあなた方みたいなのは、ハデスにとって、どこをどう見ても気に障る「侵入者」なんだ。そのへんの機微は分かりますか？

オルフェウス うーん、まあ。

カロン だからそんな侵入者を懲らしめるため、ハデスは特別ルートに、とっておきの関門を置いた。

オルフェウス 関門だって？ 何だそれは？

カロン ケルベロスですよ。

ディオニュソス ケルベロスとは？

カロン 背丈が山ほどもある猛犬です。あー「地獄の番犬ケルベロス」って言やあ、この界限では、それ

なりに有名ですよ。もちろん高位の神さまにとっちゃ、小さな犬ところに過ぎませんでしょうがね。

ディオニュソス 要は、体が大きな番犬なのだな。

カロン そう、それだけの話です。でも、このケルベロスがいる関門をですよ、実際に通り抜けて冥府に辿りつけた奴は、これまでに一人もいないんです。本当に、ハデスが冥府を治め始めてからこのかた、ただの一人として。

オルフェウス 一人もなのか。

カロン そうです。ニンフや英雄的な人間なんかが挑戦しましたがね、みんな返り討ちに遭ってしまいました。イッヒッヒ。

オルフェウス ……

カロン あー、それで「死者になった挑戦者」はどうなるかというですね、後日「正規のお客」となつて、再びわしの船に乗ることになるんです。このときにケルベロスの敗北者の顔を見るのが、わしにはもう、楽しくて仕方ないんですな。

オルフェウス（ディオニュソスに）これは一筋縄ではいかないらしい。

ディオニュソス そうだな。だが、かの偉大な神は、そのような難関があつたとしても、私たち二人が協力しあえば、これを必ず突破できると言っていたのだ。今は、その言葉を信じればよい。

「ディオニュソスが、そう言って船を降り始める。そのあとをオルフェウスが続く」

カロン（甲板から）あー、では御二人のご無事を祈りつつ、わしはこのへんで去らせていただきます。なにせ現世側の河岸には、まだまだ沢山の死者が待っておりますからね。

オルフェウス ああ。

カロン まあ、明日あたりには、今度は、本当の死者となった御二人に出会えるかと思うんですがね。ケルベロスにかかつては、どんな奴でも瞬殺ですから。そのときには丁重に、御二人を私めの船にお迎え申し上げますよ。イッヒッヒ。

ディオニュソス お気遣い無用。

カロン では、よい旅を（中州を離れる）

オルフェウス さっさと行ってしまえ！

第9章

ケルベロス退治

登場人物

ディオニュソス ブドウ酒の神、虚無の神。

オルフェウス アポロンに仕える、天才的な詩人音楽家。肌身離さず豎琴を持っている。

ケルベロス 三つの首と、三つの尾を持った巨大な猛犬。地獄の番犬ケルベロスと呼ばれている。

中州の地下トンネル

すでに中州の地下トンネルを歩いている、ディオニュソスとオルフェウス。ヘルメス・トリスメギストスのそれと同じように、ディオニュソスの杖の先が光って、明り取りになっている。

ディオニュソス オルフェウスよ、二人きりになったところで、お前に尋ねたいことがある。

オルフェウス 何でありましょう、異形の神よ。

ディオニュソス ん……そのような言葉からも感じるのだが、お前は私に、何かわだかまりのようなものを持っているのではあるまいか。

〔あからさまにオルフェウスの表情が固くなる〕

ディオニュソス 図星か。では、すまぬがその理由を教えてほしい。べつにお前を罰する気持ちはないから、どうか率直に言ってほしい。直せるところがあれば直しましょう。

オルフェウス 畏れながら……私はアポロン神に仕える者であり、またアポロン神と親しく関わっている者でもあります。この豎琴もアポロンさまから頂きました。

ディオニュソス ああ、そうらしいな。

オルフェウス そして……あなたを疎んじられているのは、結局アポロンさまなのです。私はアポロンさまの強い影響下にある者として、どうしてもあなたに好感を持てなくなっているだけだとも言えましょう。

ディオニュソス 同じゼウスを父親に持つ兄弟神であるのに、どうして兄は私を嫌うか？

オルフェウス そもそもアポロンさまは、あなたを兄弟とは認めないと言っております。もちろん、フリギアや中東での活躍は知っていますが、それでもなおアポロンさまは、あなたを邪神であると断じられておられるのです。

ディオニュソス どうしてなのだ？

オルフェウス そういえば……とくに理由を挙げられたことはありませんね。

ディオニュソス 理由はない、と……フ、なるほど分かった。要するに、生理的に受け付けられないということだ。つまり存在の神は、虚無の神を受け入れられないのだ。

オルフェウス はて……

ディオニュソス ああ、そうなのだオルフェウス。考えてみれば私とアポロン神とは、見事なまでに「最も対極にあるもの」を司っている二神なのだ。あるいは我々は、創造神ゼウスの中でのみ調和することが出来る、たがいに最果てにある二つの点なのだ。だから調和の場を離れば、そのときには反目しあう他はないという訳だ。

オルフェウス 私には、あなたが仰っていることが分かりかねますが……

ディオニュソス いや、いいのだ。フフフ、兄が私を嫌うことも、兄に仕えるお前が私を嫌うことも仕方ないことだと分かった。それで十分だ。

オルフェウス お怒りでしょうか。

ディオニュソス 怒りなどしないさ。怒っても無駄なことだ。ただ……うむ、ただ私たちが、共通の目的を持った二人きりの仲間であること。そして、かの偉大なる神が「二人が協力すれば目的を達せよう」と言っていたことに思い致そう。そういう方向にしか、生産的な答えはないのだからな。

オルフェウス おお……

ディオニュソス 私の方からは、出来るかぎり誠実に、お前に協力することを約束する。だからお前もまた、出来るかぎり私に対して心を開いてほしい。

オルフェウス もったいないお言葉です。

ディオニュソス では、まずは「アレ」をどうにかする算段をつけようではないか。ひとまず明かりを消すぞ。

〔遠くに、ケルベロスらしい犬の姿が見える〕

オルフェウス 何という異様な姿だ。三つの首を持ち、三つの尾を持っている。だがそれでも一匹の犬なのだ。

ケルベロスとの対決

久しぶりの侵入者の気配を感じて、ケルベロスが興奮しはじめている。ディオニュソスとオルフェウスは、いまだケルベロスから離れたところに潜んでいる。しかし、二人はすでにケルベロス退治の妙策を立案し終えており、今やそれを実行に移すばかりの段になっている。

オルフェウス では、まず私から試みてみましょう。（豎琴を鳴らし始める）これで奴が眠ったら儲けものです。

ディオニュソス さて、どうなるものか。

オルフェウス（歌う）

夜の静寂、闇の安らぎ、

なよやかな暗がりの世界が、

いま心底よりお前を憩わせる。

ケルベロスよ、眠るがよい。

そつと息を吐くたびに、

しだいにお前の力は抜けていき、

そつと息を吸うたびに、

深い安らいがその胸を満たす。

ここには軽やかな草花の萌みも、

また陽だまりの和やかさもないが、

しかしそれでも、

しつとりと包み込むような、

優しい暗闇が、はてもなく、

どこまでも美しく広がっている。

ああ、美しき夜よ、柔らかなる闇よ、

どうか猛き心を包み込んで、

すべての煩いを忘れさせたまえ。

どうか愉しい愉しい夢の世界へと、

速やかに彼の心をいざないたまえ。

「ケルベロスに変化はない。むしろ、より興奮している」

ディオニュソス どうも眠りそうにないな。

オルフェウス 驚いたな。普通の動物だったら、私が吟唱する二三句を耳にただけでも、その詩の内容に囚われてしまうものなのに。あるいは、私の声が、奴の耳まで届かなかったのだろうか。もっと近づいて歌ったほうがよいのだろうか。

ディオニュソス やめておけ。下手に近づけば命はない。やはり奴は、普通の犬でもなければ、普通の動物でもないのだろう。

オルフェウス それは、見るからにそうですが。

ディオニュソス それにほら、どう見ても無粋な顔をしているだろう。きっと奴の心は、土くれのように乾き切っているのだ。あのツラがお前の芸術を理解するとは到底思えない。

オルフェウス そうなると、あなたにお任せするしかありませんね。

ディオニュソス ああ、無教養で無粋な奴を相手にするならば、まさしく私の方が適任だ。芸術によって心を酔わせることを知らない無粋者にこそ、酒の「肉体を酔わせる力」は、その真価を発揮するのだ

からな。

「ディオニュソスが冠を脱いで、それをケルベロスの近くに放り投げる。すると即座にブドウの蔓が伸びて、あたり一面が森のようになる。ただちにブドウの房も垂れ下がり、周囲に甘い匂いが立ち込める」

オルフェウス おお、これが神の力か！

ディオニュソス 惜しまず滴り落ちるがいい、甘きブドウの汁よ。お前はもう、熟成したワインの香りを放っている。ケルベロスよ、お前も遠慮せず、この甘露の雫を口にするがいい。

「最初のうち、ケルベロスはくすぐったそうに鼻を擦っていた。しかしながら、まず第一と第二の犬首が目をトロンとさせ、ついには第一の犬首が、葡萄の房へと、その口をくつつける」

オルフェウス おお、さっそく飲み始まったぞ。母犬の乳房でも吸うように、無邪気にチュウチュウとやっている。

ディオニュソス 見ろ、二つめの首も吸い出した。最初に吸い出した犬首は、もう酔っぱらって眠ってしまったらしい。

オルフェウス あ、でも二つめの首は、急に、飲むのをやめてしまいました。隣の首が眠ってしまったので、さすがに警戒したものらしい。

ディオニュソス とはいえ、もうすでに、少なからず酔いが回っているはずだ。奴の意識の柱はぐらついている。あと一押しで倒れるところなのだ。

オルフェウス 確かにそのように見えます。そして、こんな時にこそ、私の竖琴と歌が、お役に立つのではないでしょうか。

ディオニュソス ならば歌ってもらおう。

オルフェウス（歌う）

可愛い子犬、三つ首の、

優しいおめめを並べた子たち。

さあさネンネの時間です。

あたりは暗くなりました。

ママの乳房も張ってます。

ほうら、この手に包まれて、
たんとお乳をお吸いなさい。

〔二つめの犬首が、ふたたびブドウの房を吸い始める〕

オルフェウス（続きを歌う）

甘いミルクを飲み干して、

ポンポを満たして眠りましょ。

明日の午後に目覚めたら、

ママと遊びの続きをしましょ。

はい、スヤスヤ、

スヤスヤ、スヤスヤ……

〔二つめの首が眠る〕

ディオニュソス 大したものだ、眠ってしまったぞ。

オルフェウス あなたが言ったとおりのことです。酔ってグラついていた意識の柱に、私は最後の一押しを加えたに過ぎません。

ディオニュソス 私も、ちょっと眠くなってしまった。

オルフェウス ハハハ、面白いことを。

ディオニュソス とはいえ問題が残っているからな、悠長に眠ってもおられん。

オルフェウス ええ、最後の犬首ですね。

ディオニュソス こいつばかりは酒を飲もうともしないし、眠る気配もない。

〔第三の犬首、よだれを垂らしながら剣呑に唸る〕

オルフェウス 今にも襲いかかってきそうな剣幕ですね。となりの二つの首が眠ってしまったのを見て、ことさら警戒心が高まったようです。

ディオニュソス とすれば酒は飲まないだろうし、お前の歌も効かないだろうな。

オルフェウス どうしたものでしょう。

ディオニュソス どうしたものか……まあ、どれほど化け物じみても、奴の根っこの部分は、やはりワンコロだと思うのだよ。

オルフェウス と言いますと？

ディオニュソス 結局、大きな力でねじ伏せるのが、一番確実な「手」なのかもしれないということだ。自分よりも強い奴にはシッポを振る、それが犬の本能だからな。

オルフェウス ですが、この巨大な猛獣をして、力で捻じ伏せることなど出来まじょうか？

ディオニュソス 今も派手に唸っているが、何といっても、もともと三つあった首が一つになってしまったのだ。ケルベロスの奴だって、本心では相当心許ないに決まってる。いや、心許ないからこそ、ああやってムキになって、我らを威嚇しているのだろう。

オルフェウス 要するに、あいつの芯の部分は折れかけているのだと。

ディオニュソス そう。だからもう、本当にちょっとしたキッカケさえあれば、奴の心は、それでポツキリと折れてしまうはずなんだ。

オルフェウス でもどうやって？

ディオニュソス そうだな、定めし、これぐらいのハタタリであっても充分だろう。

「ディオニュソスが、ここで持ち前の「変身の力」を見せる。すなわちこの神は、突如として巨大な犬になったのである。四つの首と尾を持った、ケルベロスの倍ほどもあるような犬に」

オルフェウス おお！

ディオニュソス（ケルベロスに）グルルルルルルルル！

ケルベロス グルルルルル……

オルフェウス アッハ、すごい、ケルベロスのやつ、完全に負け犬の顔だ。あの凶暴だった化け物が、道の端っこに逃げていく。

「ディオニュソスが、犬の姿のままで、オルフェウスに自分の首をつきだす」

ディオニュソス 乗るがいい。

「オルフェウス、ディオニュソスの鼻先に、おずおずと跨る」

ディオニュソス このままハデスのもとまで走るぞ。番犬がいるのだから、この通路は、ハデスの王城と直通なのだろう。

オルフェウス はい。

第10章

ペルセフォネー

登場人物

ディオニュソス セメレーの子ディオニュソスとして生まれる前、ザグレウスという名前で生活していた。
オルフェウス アポロンの信徒である芸術家。豎琴を弾きながら詩を歌う。死んだ妻を、生者の世界に連れ戻すために冥界に降って来た。

ハデス 冥界を統べる王。ゼウスの弟でもある。

ペルセフォネー 農耕の神（大地母神）デメテルの娘。ハデスに誘拐されて冥府に連れてこられた。今はハデスと結婚して冥府の女王となっている。

冥界の番兵 A ハデスに仕える兵。番兵 A と表記。

冥界の番兵 B ハデスに仕える兵。番兵 B と表記。

※文中、番兵 A B のアルファベットの向きが一定しない。修正することが出来ないため、そのまま配信することにする。

冥界の王城へ

すでにディオニュソスは人間の姿へと戻っている。そしてオルフェウスとともに、冥界の番兵たちに拘束されて——腕を縛られて——歩いている。ディオニュソスとオルフェウスが横並びになり、番兵たちが、それを外側から挟んでいる形である。石畳の道をゆくが、もうさほど遠くないところに、ハデスの王城が見える。

番兵 A（番兵 B に）冥府の門を誰かがくぐるなんて、これまで一度たりとも無かったのにな。

番兵 B まったくだ。(ディオニュソスとオルフェウスに) だから俺たちは、正直いって、お飾りの門番に過ぎなかったんだ。そこにお前たちがやってきたことで、初めて仕事らしい仕事をする事になった。お前たちの腕を縛った縄の縛り方も、それが合っているのかどうか、ちょっと自信がないぐらいなんだが。

番兵 A そんなことバラすんじゃない。(ディオニュソスとオルフェウスに) それにしても、お前たちは本当に何者なのだ? ここまで来たということは、あのケルベロスを倒したか、もしくは抜け駆けしたということなのだろう。どちらにしても、到底あり得そうにない話だ。

オルフェウス(ディオニュソスを見ながら) この方は神だ。まことに偉大な……この神に不可能なことはないのではないか。

番兵 B 神だと? それは真実のことか。

オルフェウス 私も啞然としたのだ。あのような変身の力があるとは……いや、実際に目にしなければ分からぬことだろう。それでも、あのケルベロスの関門を越えられたことが、この方が神であることの、その何よりも雄弁な証拠となるのではないか。

番兵 A たしかに、あの番犬を宥めることが出来るのは、この地下世界では、冥府神ハデスさまだけだ。そのハデスさまと同等の業を為せたのだとしたら、この方も、やはり有力な神なのかもしれない。

番兵 B そうだとしたら、この縄を解かなければ、我々にも神罰が下るんじゃないか。

番兵 A そうだな。解いたほうがいいな。

ディオニュソス いや、いいのだ。私は冥府の神のやり方に肅々と従う。私たちは、決してハデスに抗うために、ここに来たのではないのだから。

番兵 A とは申ししても……

ディオニュソス 私たちは、ハデスに縋って、頼みごとをするためにここに来たのだ。お前たちに逆らわぬことは、冥王に逆らわぬという意思表示ともなろう。

番兵 A では形式を守るために、ただそれだけのために、このような不遜なことをしている事を分かってください。私たちに、神をないがしろにする意志はございません。

ディオニュソス 分かった、大丈夫だ。

番兵 A では、まもなく王城に入ります。すでにハデスさまには、来訪者についての報せが届いておりますから、どうか安んじて、我らとともにお進みください。

オルフェウス どうか。きっと来訪者ではあるまい。さだめし侵入者の報せが届いているのだ。

番兵 A どちらにしても同じことです。ハデスさまは、余所者が来ることを、極端に嫌う方ですから。

オルフェウス それは嬉しくない話だな。なおさら安んじてられない。

〔一行が王城の門扉を通り過ぎる。王城の内部に入った形〕

ディオニュソス ところで、ハデス神に、お妃はおられるか？

番兵 A 三年前に娶られました。

番兵 B 大きな声では申せませんが、地上から攫ってきたのです。

オルフェウス それはまた、ずいぶんと物騒な話だな。

番兵 A ですが、そのような事をするのも無理からぬ話。とても美しい方ですから。

ディオニュソス お妃さまのお名前は？

番兵 B ペル

番兵 A 申し訳ありませんが到着です。あの扉の向こうに、ハデスさまとお妃さまがおられます。

玉座の間

扉を開けるといきなりテラスになっている。つまり、出ばった狭いスペースと手すりだけがある状態。

テラスの先には深い暗がり広がっているが、その暗がりの先に見えるものがある。すなわち、巨大なハデスと、その妃が座っている姿が、横並びに浮かび上がっている。その二人の大きさと比べると、ディオニュソスたちは、小さなネズミのよう。

訪問者としての礼儀により、ディオニュソスとオルフェウスは、その顔を伏せて立っている。

ハデス 二人の乱入者とはお前たちのことだな。お前たちは一体何者なのだ！

オルフェウス 来訪者が侵入者に、どころじゃない。乱入者あつかいだ。

番兵 A（ディオニュソスを指しながら）こちらの方は、ご自身を神であると仰っています。

ハデス 神だと？ お前のような者は、オリュンポスで見たことがないぞ。

ディオニュソス 私は、まだ新しい神なのです。

ハデス ならば、いかなる親より生まれた神であるか？

ディオニュソス 大神ゼウスと、セメレーという人間の女から。

ハデス ゼウスだと？ 兄者の子だというのか？ とすれば私の甥ではないか。

ディオニュソス そういうことになります。

ハデス とは申せ、母親は人間なのだ。ならば神といっても半神。大した神格を持っている訳ではない。であれば、そう手厚く遇してやる必要があるまいて。

ディオニュソス どういう意味ですか。

ハデス 半神ごときならば、このまま地上の世界に送り返しても構うまい、ということだ。

オルフェウス ひどい！

妃 王よ、せめて彼らの顔だけでも見てあげては如何です。

ハデス 何だと？

妃 そもそもあなたは、この地下世界に閉じこもりすぎなんです。余程のことがないと、決して他の神々と交わろうとしない。私のことだって、正式な交渉もなしに、地上から地下へ引きずり込んだ形で……

ハデス いまは関係のない話だ。お前はいつも、そのことを蒸し返してばかりだな。

妃 だって、あなたにとっては不愉快な乱入者であっても、私にとっては、久方ぶりに会う地上からの来訪者なのです。このまま顔を見ることもなく、彼らが地上に送り返されるなんて、私にとっては、あまりにも悲しい話だわ。

ハデス むう……仕方ない。二人とも顔を上げよ。

〔ディオニュソス、オルフェウス、伏せていた顔を上げる〕

妃 あら、二人とも高貴な顔立ちをしているわ。どちらも眼差しが深い。

ディオニュソス ……

オルフェウス（ディオニュソスに）どうしたのですか、様子がおかしいですよ。

ディオニュソス 母上……

オルフェウス 母上ですって？

ディオニュソス お妃さま、あなた様のお名前は「ペルセフォネー」と仰るではありませんか。

ペルセフォネー（妃）ええ、いかにもペルセフォネーです。どこかでお会いしたことがあります？

ハデス（ペルセフォネーに）地上での知り合いか？

ペルセフォネー いえ、私は存じ上げませんが。

ディオニュソス 存じ上げない……いや、仕方ないかもしれません。では、この姿ではどうでしょうか。

〔ディオニュソスが、ザグレウスとしての自分（乳児）に変身する〕

ペルセフォネー まあ、とてもキレイな赤ちゃんだわ。あなた変身することが出来るのね。

ディオニュソス この姿を見ても何も感じませんか？

ペルセフォネー きれいな子だと思っていますよ。

ディオニュソス そうではなくて。あなたが、この子供を生んだのですよ。

ハデス 子供を生んだ？ 妃、本当なのか？

ペルセフォネー まさか！ そんな事はありません。私は「永遠の処女ペルセフォネー」と呼ばれていた女神なのです。あなたに無理やり犯されるまでは、そもそも男を知りません。ましてや、子供を生んだことなど、ある訳がありません。

ディオニュソス は……はは、すべて忘れてしまっているのですか。（もとの姿に戻る）

ペルセフォネー 忘れるも何も、私はあなたなど知りません。

ディオニュソス そういえばあなたは、私を捨てることで、往時の記憶をも捨てたのでしたね。ゼウスに犯されたことも……

ペルセフォネー ゼウスに！ どうして、そんな作り話をしてまで、私を貶めようとするのです。

ディオニュソス 貶められているのは私のほうです。なにせ実の親から「お前は親なし子だ」と言われているのですから。

ペルセフォネー もうおやめなさい。これ以上侮辱を続けるなら、王が言うとおりに、お前たちを、すぐさま地上の世界へと送り返しますよ。

ディオニュソス おお、それが冥府の女王の権力か。ですが聞いてください。あなたが冥府の女王であるならば、私は本来、この冥府の王子と呼ばれていたはずなのです。あるいはハデスの王子、地獄の王子、と。

ペルセフォネー 何を言って……

ディオニュソス けれども今の私は、この地下世界にあって一侵入者に過ぎない。これは何という皮肉なのでしょう。ああ、ああ、それもこれも、すべてはあなたが私を忘れたこと、私を捨てたことが原因なのです。

ペルセフォネー もう我慢なりません。王よ、この者たちを地上にお返しになって！

〔興奮する女王を前に、オルフェウスが豎琴を弾きはじめる〕

ハデス 何だ？

オルフェウス（歌う）

遠望の彼方に何かが見えませんか？

遠い遠い記憶の向こう側に、

何か懐かしいものを感じませんか？

忘れたと思っていても、

何よりも濃い、母子の血のつながりが、

一筋の愛を喚起するものではありませんか？

彼をどうにか排斥しようとしても、

どうしても、そうしきれない気持ち――

こうして私が奏でる旋律が、

そんな気持ちを、

呼び起こしはしないでしょうか。

どうして母親が、そのお腹を痛めて生んだ、

わが子のことを忘れることが出来るでしょう。

たとえ、その心が全てを断ち切ったとしても、

それでもなお、二つの肉体に、

同じ血が流れているという事実が、

とこしえに断ち切れない絆として、

ここに母と子を、

再び結びつけるのではないのでしょうか。

美しき王妃よ聞きなさい、

ここにあなたの息子を名乗る神がおります。

もし彼が真実を語っているのだとたら、

妃よ、あなたにはもう、

彼に冷たい態度を取ることなどは、決して、

出来なくなっているのではないのでしょうか。

ペルセフォネー ああ、何でしょう。この歌を聞いていると、ギュッと胸が締め付けられるようです。何の記憶もありはしないのに、なぜか、この神をすぎなくあしらうことが躊躇われるのです。おかしい、おかしい、こんな気持ちになる理由など、決してありはしないのに。

ハデス この神は、やはりそなたの子供なのか？

ペルセフォネー 分かりません。本当に何も分からないのです。ただ私の中の何かが、この神のことを振り払うのを躊躇しているのは確かです。ああ、デメテル、デメテル、どうか私を助けてください。

ハデス（妃の顔を見ないようにしながら）もうよい。今となっては、真実など知りたくもない。そうだ私は「お前が、この先も私の妃であればそれでよい」と心に決めたぞ。よし構わぬ。二人の客人たちよ、お前たちを望みの死者のもとへと連れて行ってやる。もうそれでよいな！

ディオニュソス ……

オルフェウス もちろん、それが我らの第一の望みです。しかしながら……

ハデス しかし、なんだ！

オルフェウス 私は妻を、生者の世界へ連れて帰りたいのです。

ハデス 図に乗りおって！

そんなことを私が許すと思うのか！

いつそお前のほうを死者の国の

住人としてやろうか！

ペルセフォネー ハデスさま、どうかこの方たちを無下にあしらわないで。

ハデス むう……

オルフェウス どうかお願いします。

ハデス ああ分かった！ 冥王の沽券に関わるがゆえ、ただで死者を連れていかれる訳にはいかないがな。この度の帰還には条件がある。ただし、それは追って伝えることにしよう。

〔ハデスが、ディオニュソスのほうに向きなおる〕

ハデス それよりも今はお前だ。俺は誰より、まずお前にさっさと去ってほしいのだ。お前は誰に会いたいのだ？

ディオニュソス 母に……ザグレウスの母ではなく、ディオニュソスの母であるセメレーに。

ハデス たしか人間の女だったな、そのセメレーとやらは。

ディオニュソス そうです。是が非にも会わせてください。

ハデス お前もまた、その母親を、生者の世界に連れ帰るつもりなのか？

ディオニュソス 分かりません、分かりません。ただ、今はとにかく母に会いたくて仕方ないのです。私を本当に愛してくれた、ただ一人のひとに。

ペルセフォネー ハデスさま、この者の願いを叶えてあげてください。そしてあなた（ディオニュソス）、願いを叶えたならば、どうか、もう二度と私の前に現れないと約束してください。

ディオニュソス 二度と……なのですね。

ペルセフォネー あなたを目にすると、それだけで私の胸は苦しくてたまらなくなる。まるで、カミソリで心臓の皮を削がれているような気持になる。こんな思いは、今後もう絶対にしたくありません。

ハデス では、まず神のお前、お前は、ここに案内をしてきた番兵のあとを附いていけ。奴に道案内をさせるゆえ、真っすぐ母のところへ行くがいい。

ディオニュソス 痛み入ります。

ハデス そして人間、お前のほうには少し話があるから、ここに残れ。さっき言った「条件」を言い渡す。

オルフェウス かしこまりました。（ディオニュソスに）では、あなたとはここで。

ディオニュソス そういうことだな。お前には世話になった。感謝している。

オルフェウス 私のほうこそです。あなたがいなければ、私は決して、ここまで来られなかったでしょう。

ディオニュソス また地上で会えるといいな。

オルフェウス きっと会いましょう。それでは。

ディオニュソス ああ。もう番兵が待っているからな。さらばだ。

番兵 A（ディオニュソスに）それでは、セメレーなる死者のもとへご案内いたしましょう。

ディオニュソス 頼む。（振り返って）ハデスさま、心より感謝いたします。そしてお妃さま、ありがとうございました。

「ペルセフォネーはそっぽを向いており、ディオニュソスと顔を合わせる気は毛頭ない。そんなペルセフォネーをチラと見ると、ディオニュソスもまた向きを変え、二度と生母のほうを見ないようにする。だが、その目には涙が滲んでいる」

第11章

テュオーネー

登場人物

ディオニュソス セメレーの息子。

セメレー ゼウスに愛され、十五年まえにディオニュソスを孕んだ。しかし、ヘラの嫉妬のために、その出産と同時に焼死させられる。

ヘルメス・トリスメギストス 三倍も偉大なるヘルメス。

番兵 実質は番兵 A であるが、ここでは番兵 B が登場しないので、シンプルにただ番兵とだけ記すことにする。ハデスの命を受け、ディオニュソスを、セメレーの居場所まで案内している。

☆ステロペーとメロペー 子鹿に変身したディオニュソスを、五年ものあいだ養育したニンフたち。

セメレーが住んでいる世界

灰色の空のもとに広い草原が広がっている。遠景には山の連なりが見える。そこをディオニュソスと番兵とが並んで歩いている。

番兵 もうすぐですよ、あなたが望まれた場所に着くのは。

ディオニュソス この景色、とても地下世界のそれとは思えないな。高い空があって、遠い景色がある。まるで地上の世界を歩いているみたいだ。

番兵 そうでしょう。というのですね、えー、まずさしあたって、王宮のあたりまでは「地下」という現実性が、周囲の景色にも反映されることになるんです。

ディオニュソス ほう。

番兵　ところが、さらに地下深いところまで達するとですね、冥界というのは、まるっきり死者たちの想念が練り上げた「霊的世界」となってくるんですよ。つまり彼らの「地上での記憶」が、想念として、空間の形成に影響を与えるんですな。そのため、かえって人間らしい、現世的な景色が広がるんですよ。

ディオニュソス　正直言って、死者の国とは、もっと陰気なものだと思っていた。

番兵　死んで肉体を失って心だけが残る——その心の世界ですからね。醜い性根を持って死んだ者が送られる場所は、やはり相応に酷いところですよ。本当に「地獄」としか形容できないような……

ディオニュソス　それは恐ろしいな。

番兵　しかし、あなたの母君は、いたって清らかな心をお持ちのようだ。それは、この景色からも伝わってきます。

ディオニュソス　だが惜しむらくは、どこか薄暗い感じがする。

番兵　この暗さは、冥界を統治している、あのハデスさまの性格が滲み出たものです。ですから、いかなる死者も、この暗さばかりは、追い払うことが出来ません。そして、ハデスさまの孤独な気持ちもまた、あらゆる死者にのしかかってきます。一種の空気として。

ディオニュソス　ああ、ここにいる私にも、それは確かに伝わってきている。というのも、確たる理由もないのに、常時そこはかとないう寂しさを感じるのだ。まるで、ずっと秋の終わり頃の風を受けているかのように。

「セメレーの住まいが見えてくる」

番兵　ああ、ほら、あの一軒家がそうです。あそこに母君がおられるはずです。

ディオニュソス　あれなのか？　　城でもないし、家としてもかなり小さいぞ。母は、いやしくも一国の姫君だった人なのだよ。

番兵　たとえ姫君であっても、その心根は、小さな家での暮らしを好まれるような、家庭的なものだったのでしょう。冥界の景色は、あくまでも、その心象の反映ですからね。地上での肩書は関係ないんですよ。ディオニュソス　そういうことか。そういう意味でならば、あの家は、母上に相応しいもののような気がします。母上があそこに住んでいることは、きっと間違いないことなのだろう。であれば……

番兵 分かりました。私はここで引き返しましょう。

ディオニュソス ここまでご苦労だった。ありがとう。

番兵 では。

「来た道を引き返していく番兵の姿をディオニュソスが見つめている。しかし、その後姿がある程度小さくなると、ディオニュソスは、逸る気持ちを抑えられなくなる。彼は勢いよく振り返り、セメレーの家に向かって夢中で走っていく」

セメレーの家

セメレーの家

ディオニュソスは、セメレーの家の前に立っている。彼の眼前には、玄関の扉がある。

ディオニュソス（扉を叩きながら）開けてください。どうか開けてください。

「扉が開き、家の中から一人の女性が現れる。セメレーである。彼女は突然の訪問者に驚きながらも、ディオニュソスをじっと見つめて言う」

セメレー ディオニュソスね。

ディオニュソス 分かるのですか？

セメレー 分かるわ、私の子供ですもの。

ディオニュソス（泣きながら）ああ、あなただ。あなただけが私の母親だ。ああ、母さん、母さん、母さん。

「ディオニュソスがセメレーに抱きつく」

セメレー どうか顔をよく見せて。ああ、そんなに泣いたら、あなだがどんな顔なのか、よく分からないわ。

ディオニュソス（セメレーに顔を見せながら） あなたも泣いてる……

セメレー 本当に嬉しいから……あなたを思わない日なんてなかったから。

ディオニュソス 本当ですか。いや、本当なのですね、母上……

セメレー もちろんよ。でも、ここにあなたが来たということは、あなたは死んでしまったのかしら。

ディオニュソス 違います、違います。私は死んでいません。

セメレー（ディオニュソスと少しだけ距離を作りながら） では、どうしてこの死者の国にいるのです。

ディオニュソス 母上に会いたくて。ただただ会いたくて。それ以外のことは何も考えていませんでした。

セメレー きっと、ずいぶん無茶をしたのね。

ディオニュソス でも、そうするだけの価値がありました。こうして母上に会えた喜びよりも、大きな苦労はありませんでしたから。

セメレー（再び抱き合って） ありがとう。嬉しい。本当に嬉しい。いつまでもこうしていたいわ。

ディオニュソス いつまでもこうしていきましょう。

「母子はしばらく抱き合っていたが、セメレーがゆっくりとディオニュソスを引き離す。そして真剣な眼差しで、息子に問いかける」

セメレー でも実際には、いつまでこうしていられるのかしら？

ディオニュソス 何ですって？

セメレー だって私は死んでいて、あなたは生きているのですもの。いつまでも一緒にいられる訳ではないのでしょう。

ディオニュソス あ……会うこと自体が目的になってしまっ、そのような事は考え忘れてしまいました。でも確かにそうです。母上、私はあなたを、このように暗くて寂しい世界に置き去りにしていくことは出来ません。

セメレー でも、私が地上に還ることなんて、冥界の王が許すはずもないわ。

ディオニュソス いや、それは私がかします。

トリスメギストス いっそ、天界に連れて行っはどうかね。

〔突如としてヘルメス・トリスメギストスが現れ、母子の脇に立つ〕

セメレー 誰！

ディオニュソス ヘルメス・トリスメギストス！

トリスメギストス よくぞ、ここまでたどり着いたな、ディオニュソス。

ディオニュソス ああ、本当にいつも、あなたには驚かされる。

セメレー ディオニュソス、こちらはどなたなの？

ディオニュソス この方はゼウス以上に偉大な神です。それ以上のことは言えません。（トリスメギストスに）それにしても主よ、あなたは先ほど何と仰いました？ たしか母を天界に連れて行くと。

トリスメギストス そうだ。実を言えば、これはゼウスの意向でもあるのだ。彼奴はセメレーのことを、ずっと気にかけておっ。現状として彼女が囲っている不遇を、どうにかして払拭してやりたいと考えていたのだ。

セメレー あの方が、私をですか？

トリスメギストス ああ。

ディオニュソス そんなことを考えていたのなら、父上みずから、母上を助けてあげれば良かったのに。

トリスメギストス なにぶんヘラの嫉妬が邪魔してくるからな。ゼウスが他の女のために働きかけると、

すぐにヘラがそれに勘づいてしまう。そして、彼女の嫉妬心が、もとの不遇を、もっと酷い不遇へと変えてしまうのだ。

ディオニュソス それは確かに……

セメレー ヘラさまは今も、昔と変わらぬ恐ろしい女神なのです。

トリスメギストス それだからゼウスは、自分の代わりとしてディオニュソス、お前をこの冥界に送り込んだのだ。そして、こうしてセメレーと接触させた。

ディオニュソス 何を言うのです！ 私がここに来たのは、私の意志によるものです。

トリスメギストス だがセメレーの墓を壊したのはゼウスなのじゃよ。むろん涙型の石片を削り出したのもな。そして私に、お前への助力を依頼してきたのもゼウスだった。

ディオニュソス なんと狡猾な！ なんと老獪な！

トリスメギストス まあ許してやるがいい。結果的に、こうしてセメレーに救いの糸が垂らされることになったのだからな。

これより後の展望

ヘルメス・トリスメギストス、ディオニュソス、セメレーの話し合いが続く。

ディオニュソス それで「天界に母を移す」という話になるのです。

トリスメギストス うむ。

ディオニュソス ですが、天上界にはゼウスばかりでなく、ヘラその方だっているでしょう。とすればそこは、ここよりもずっと危険ということになりはしませんか。

トリスメギストス 私の力により、天界の一角に、ヘラですら入れない領域を作っておいた。いや、そこに住むセメレーが望まないなら、ゼウスですら入れない領域をな。そこでならセメレーは、安全に暮らすことが出来るだろう。

ディオニュソス たいへん画期的なお話です。ですが、それでは母は幽閉されているも同然ではありませんか。その領域から出たが最後、母はすぐにヘラ女神の目に晒されてしまうのでしょうか。

トリスメギストス いや、その点も考えてあるのだ。セメレーには、名前と姿を変えてもらおうと思っておる。

ディオニュソス え、ヘラ対策のために、母を「母以外の誰か」に変えてしまおうというのですか？ そのような提案には、息子として断じて肯んじられない。

トリスメギストス いや、偽名や偽装といったレベルの話ではない。人間の女を、女神に変えてやろうと言っておるのじゃ。それでも不満かな？

セメレー 私が女神にですって？ 信じられないことだわ。

ディオニュソス そういうことでしたら……でも、そんなことが可能なのですか。

トリスメギストス 誰にもものを言っているのだ？

ディオニュソス 申し訳ありません。あなたに出来ないことがあるとは思いません。

トリスメギストス（セメレーに）お前はどうか？ この申し出を受け入れる気はあるか。

セメレー はい。それが、ゼウスさまからの恩顧に端を発するものならば、私は謹んでお受けしたいと思います。

トリスメギストス ゼウスからの恩顧ならば、か。フフ、ゼウスも可愛い女を愛したものじゃ。何より一途なところがよい。

「セメレーが顔を赤らめる。それを見たディオニュソスが、なかば諦めたような表情を浮かべる」

ディオニュソス それではお願いします。

トリスメギストス うむ。(セメレーの頭上に杖をかざして言う) 神に愛され、神の子を生んだ女に相應しい栄光よ、ここに宿れ。

「セメレーの体から光が放たれ、同時にその体が一回り大きくなる。顔つきも神々しくなり、まさしく女神そのものの姿となる」

セメレー これが私ですか。身体の中で光が踊ってるようだわ。

トリスメギストス 原初の神を生んだのと同じだけの光を注いだのだ。霊格としては、オリュンポスの十二神にも引けを取らないじゃろう。

ディオニュソス 美しい姿です、母上。

トリスメギストス そして名前も変えてもらおう。テュオーネーというのは如何だろうか？

セメレー それは「熱狂する女」という意味ですよ。ちょっと恐ろし気に響きますけれども。

ディオニュソス ああ、でもそれはマイナス(喚き立てる者)と同じような意味です。その名を聞いただけで、人が、私とのつながりを連想するであろう言葉です。

トリスメギストス そう。その名は、ディオニュソスの印章のようなものだ。よって、ディオニュソスが活躍し、その名を高めれば高めるほど、テュオーネーもまた、神聖不可侵の存在へと高まってゆくじゃろう。あのヘラですら手出しできないほどのな。

ディオニュソス つまり、私の霊格が高まっていくことが、そのまま、母の安全保障に転化されてゆくということですね。だから私に「精進せよ」と。

トリスメギストス そういうことだ。

ディオニュソス これは責任重大ですね。

トリスメギストス(セメレーに)そういうわけで、お前は「女神テュオーネー」として、これから天界で暮らすことになる。

セメレー はい。

トリスメギストス ただし、しばらくの間は、さきに言った「外部からの侵入が不可能な領域」でじつと息をひそめているがいい。そうして、自分の存在に「絶対の威厳」を感じたとき、そのとき初めて領域の外に出るのだ。ゼウスに会いに行くもよし。息子に会いに行くもよし。

ディオニュソス そうすると、しばらくの間は退屈かもしれませんね。

セメレー ここで退屈には慣れましたけれど。

トリスメギストス フフ、退屈しのぎと身の回りの世話のために、ひとまず二人のニンフを、テュオーネーとともに、天界に上げようと思っている。その名をステロペーとメロペーと言うのだが。

ディオニュソス あ、あの二人ですね。きっと賑やかになる。素敵な話だ。

トリスメギストス そしてもう一人、格好の話し相手として、ある死者をテュオーネーの傍に置いてやろうと思う。ほんのわずか、私が光を注いでやれば、天界の大气に耐えられるだけの神性を持つことが出来るだろう。

ディオニュソス 誰を連れて行くつもりなのです？

トリスメギストス ペンテウスというのはどうだろう。

ディオニュソス ペンテウス！

セメレー アガウエ姉さんの息子のペンテウスですか？ 私が死ぬ何年か前に生まれた子ですよ。

ディオニュソス そうです。ああ、ペンテウス……あの方ならば、確かにそれに相応しいです。もう充分な罰を受けられ、充分な反省をされている。母上とも積もる話が出来るでしょう。

トリスメギストス ならば決まりだな。ではそろそろセメレー……いや、テュオーネーを天界へと連れていくことにしよう。

ディオニュソス もうですか！ いくら何でも早すぎます。それとも私も一緒に、天上界に連れていくくれるのですか。

トリスメギストス 馬鹿なことを言うな。お前には、テーバイに残してきた信徒たちがおるじやろう。かの者たちを放っておく訳にはいくまい。

ディオニュソス それはそうです。ですが、私と母にとり、あまりにも短い再会のためではありませんか。トリスメギストス 基本的に、わしに時間がないから仕方がないのじゃ。しかも、こんな複雑な「送り届け」は、わし以外の誰かに出来ることでもない。

ディオニュソス ……

トリスメギストス それに、お前が、母の膝のうえで安らぐのは、まだまだ先の話じゃ。それは、お前が「オリュンポスの神々」として認知された時まで取っておくがいい。それまでは地上で、神としての実績を積んでゆくことだ。

ディオニュソス 私はそんなに待てません！

〔興奮するディオニュソスに、セメレーが女神としての威厳を交えて、優しく語りかける〕

セメレー わがままを言うてはなりませんよ。ディオニュソス、あなたはもう大人になったのでしょう。なら分かるはずです。大人には、どうしても避けられない社会的責任がある。そして、その責任を果たすまで、自由は与えられないのです。

ディオニュソス でも、親の前に立ったときには、子供はいつまでも子供です。

セメレー ではあなたは、今はまだ、親の前に立つときではないのかわ。

ディオニュソス そんな……

セメレー（微笑みつつ）ディオニュソス、私はいつまでも待っていますよ。

ディオニュソス ……はい。

〔目を伏せながら、ディオニュソスがセメレーから一步離れる〕

トリスメギストス それでは二人とも十秒ほど目を瞑ってもらおうか。その目を開けたときには、セメレーは天界に、ディオニュソスはテーバイ国におることじゃろう。

ディオニュソス ……では母上……さようなら。

セメレー また会いましょう、愛するディオニュソス。

〔ひとしきり見つめあったあと、二人は目を瞑り、そのまま舞台は暗転する〕

おわり

戯曲ディオニュソス 二人の母 III

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
